

堅樹院日寛教学の一考察

——著作活動を中心として——

水 谷 進 良

一、はじめに―問題の所在―

執行海秀先生の『日蓮宗教学史』によれば、石山教学を体系化した人物として、大石寺二六世法主堅樹院日寛（一六六五―一七二六）を挙げられ、日寛が生きた時代を、教学史的に「江戸時代前期」として区分し、同時代における宗学意識の特色として「宗学醗酵時代」、すなわち室町時代から続いてきた台学を中心とした教学から、宗学への意識が高まった時代であると指摘されている。』¹つまり、一致派においては、安国院日講や深草元政、一妙院日導、そして勝劣派においては本寿院日悦や堅樹院日寛が出た時代であり、特に一妙院日導によって近世一致派の宗学が大成され、堅樹院日寛によって石山教学の体系をみたとされている。

この説示に依拠すれば、日寛が生きた時代は一致派・

勝劣派を問わず、従来の台学偏重の教学主義から、日蓮聖人の教えを宣揚しようとする宗学意識が高まっていた時代であったことが理解できる。

では、このような宗学宣揚の気風が高揚していた時代にあつて、日寛が体系化した石山教学とは、いかなる教義であろうか。また、日寛は日蓮聖人の教えをどのよう受け止め、その教学を樹立していったのであろうか。これらの問いが私の課題である。

そこで、このような問題意識のもと、日寛の教学がいかなるものであつたのかを知ろうとするとき、まずその基礎作業として日寛の伝記を確認し、その生涯の中でどのような著作を記し、自らの教学を樹立したのであろうか、という問題を明確にすることが日寛教学を理解する為に必要であると思考される。その為、本稿においては、日寛の伝記を確認する過程において、特に日寛の著作活動

に視点を置き、少しく探求してみたい。

二、日寛伝の検討

日寛の伝記は、管見の限りではあるが、日寛自身が享保一年（一七二六）八月七日に著した『口上』^②、大石寺四八世日量（一七七一—一八五一）の著した「日寛上人伝」^③ならびに『続家中抄』^④によってその概要を知ることができる。これらの伝記に加え、堀日亨氏等、明治以降の日蓮正宗の先師によってまとめられた著作や研究書が数書確認できる。日蓮宗教学史の立場からは、望月歛厚著『日蓮宗学説史』^⑤、執行海秀著『日蓮宗教学史』^⑥、『興門教学の研究』^⑧の三書の先行研究が確認できる。本稿においては、昭和五〇年、日蓮正宗宗務院教学部発行の『日寛上人伝』を中心資料として扱うこととし、以下、日寛の伝記を確認してみたい。

(1) 生いたちと出家

日寛は寛文五年（一六六五）八月七日、上野国前橋において、酒井雅楽頭忠清の家臣であった父伊藤静円、母妙真^⑨の間に生まれ、幼名を市之進と称した^⑩。そして九歳の時に母妙真が死去し、継母として妙順という人物に

よって育てられたと伝えられる。その後、延宝七年（一六七九）一五才にして江戸へ出て、旗本の屋敷に勤め仕えるようになる。この頃から、伊藤家の主君である酒井雅楽頭が失脚し、表向きは病気ながら、実は自害で果てたということもあり、世の無常を感じると共に菩提心の発露があったとされている。このような体験も重なり、その後の主君の命運と、縁者の菩提を祈るために法華経の『観世音菩薩品』を書写し、浅草寺観音堂に納める信仰をもつようになっていた。

そして、天和三年（一六八三）一九才の時、日寛にとって出家を志す事となる大きな出来事が起こる。この年の夏、日寛は納涼の為に門前を徘徊していると、「六十六部」の修行者と出合い問答となった。六十六部の修行者とは、日本全土六十六ヶ国を回って六十六部の法華経を国々の霊場に納める回國巡礼僧のことである^⑪。日量著「日寛上人伝」にはこの問答の詳細が事細かに記されているが以下、その主意を伺い記しておきたい。

日寛が出会った修行者は、口に弥陀の名号を唱え、心に観音を念じ、經典として法華経を納めるという、身口意不相応な信仰をもっており、日寛は修行者に対し、その旨を問うたところ修行者は答えることができなかった。

しかし、その問答を聞いていた佐兵衛という人物が、日寛が修行者へ問うた疑問に対し感銘をうけ、翌日、菩提寺である下谷常在寺へ共に詣で、住職の日精（二六〇〇—一六八三）（大石寺一八世）の説法を聴聞し、それに信服渴仰し出家を志した、という内容である。

しかし、仏道に入りたいという日寛の思いとは逆に旗本の屋敷の主人は日寛を一流の人物として見込んでおり、手放す事を惜しみ一向に出家を許さなかった。これによって悶々とした日々を数ヶ月送り、同年一二月には、意を決し、自ら剃髪し常在寺に詣で、日精の後に常在寺に住した日永を師に出家し、仏門に入り「覚真日如」と道号を賜った。¹²⁾

その後、檀林へ入檀するまでの六年間はその大半を常在寺に住し、また大石寺へ登山して日俊（二二世）、日啓（二三世）に師事し、給仕と勤行、そして台学、宗学の勉学に励んだ。

②細草檀林における修学

元禄元年（一六八八）九月、二四才にして、日寛は師日永の会津実成寺への移住に際し、それに随行し会津へ移転し、翌年細草檀林へ入檀することとなるが、その際、

さらに足を伸ばし、日蓮聖人出生の地である小湊の浜に詣でた後、入檀したと伝えられている。

細草檀林は、現在の千葉県山武郡大網白里町細草にあたる場所であり、当時日興門流と八品派の合同で運営されていた檀林で、江戸前期から幕末まで、大石寺所化の教学育成の機関としての役割を果たした檀林であったとされている。¹³⁾ また、日寛が入檀した頃は、細草檀林の最盛期にあたっており、数百の学徒が集まって股賑を究めていた頃であった。

このような細草檀林にあって日寛は、天台教学を中心とした勉学に勤しんだ。また、檀林での修学課程を終え、「新説」という学位資格を得た後も、講師として檀林へ残り、学徒へ講義を行い、宝永五年（一七〇八）には四四歳にして檀林の最高学位である、細草檀林第二六代化主へと昇り、「堅樹院日寛」と号することとなる。

その後、正徳元年（一七一）に大石寺へ戻るまで、実に二三年間を過ごしたのが細草檀林であり、日寛の教学の基礎を形成したのがこの檀林での修学であったと思われるのである。

(3) 蓮藏坊学頭時代

正徳元年（一七一二）、夏、師日永の命により、四七才にして大石寺へ戻り、蓮藏坊の学頭となり、「大式阿闍梨」と号するようになる。蓮藏坊とは、細草檀林で修学する大石寺の所化が、檀林の開かれぬ夏間に大石寺へ戻ってきた際、学頭が日蓮聖人遺文の講義を行う場であったとされており、後述するが日寛が講じたものを、弟子等によって記録された講義録も数書確認できる。

そして正徳三年（一七二三）には、日寛の代表的著作である『六巻抄』の草稿が完成されたと推察されている。この草稿は「『六巻抄』未治本」という扱いであり、真蹟の存在は確認できない。何故、代表的著作である『六巻抄』の草稿が一つも残っていないのか、という問題については、享保一〇年（一七二五）に再治された『六巻抄』再治本』の冒頭部分に記される「敢未治ノ本ヲ留ムル勿カレ」という誠めを門下が守った為であると考えられている。恐らく、大石寺法主登座時にはじめて師子相承される教義をふまえる前に著されたものである為、「十分ではない」という意味での誠めであったであろうと推察できる。

(4) 大石寺法主二六世晋董

享保三年（一七一八）、五四才の時、二五世日宥の付属を受け、三年の任期という内諾を交わし、大石寺法主二六世に晋董する。この間の日寛の事跡について、高橋肅道氏によれば福原式治・芝野源兵衛・池田孫右衛門等が日寛の教導を受け、相当の宗学を身につけて『本因妙抄』の筆記を許されたとあり、以上の三名の檀越については法主である日寛が直接書状を送り、信心の育成を計ったとされている。¹⁵⁾ 享保五年（一七二〇）には、老体であり、病身である為、法主職という大任を務めるには差し支えがあるとの理由から、三年の内諾を一年早め、日養に法灯を譲った。

(5) 晩年の生活と遷化

法主職を退いた日寛はその後、再び蓮藏坊へ住し、祖書の研鑽講著にあたることとなるが、大石寺法主二七世日養が享保八年（一七二三）六月四日、五四才で遷化し、後囑の人と目されていた人物に種々の都合があり、直ちに登山の機が至らなかつたということもあり、日寛が再び大石寺へ住することとなる。しかし、二八世の晋董は行われておらず、次代の後継者に登山の機が至るまで期

間だけであったようである。

遷化の年にあたる享保十一年（一七二六）の正月には公儀への年賀のため、江戸へのぼり、同年二月には、出家を志した寺院である常在寺において『観心本尊抄』の講義をおこなった。翌月には大石寺へ帰山するが、体調が芳しくなく、八月には死後の財物整理を行い、九月二〇日午前八時、六二才をもって遷化した。

三、日寛の著作活動

前節において、日寛の伝記について少しく確認してきたが、次いで、日寛の著作活動について述べてみたい。

ところで、日寛の著作について『日寛上人伝』に記載されている著作目録によると、合計で一二九書を確認できる。その中には、『六巻抄』や『観心本尊抄文段』等の代表的な日寛の著作をはじめ、御書の講述や、書簡等と見られる書名が列記されており、著作活動の期間は、著作年代が明らかかなものに限定すると、檀林での修学時代にあたる元禄五年（一六九二年 二八才）から、遷化の年にあたる享保十一年（一七二六年 六二才）に至るまでの、三四年間にわたっていることが確認できる。

しかし、『日寛上人伝』に収録されている著作目録で

は、日寛の記した著書名と、著作年次、および備考の項があるのみで、書誌学的検討はなされていないようである。そこで、日寛の一二九書の著作に対する分類化を試みることによって、その内容の検討、さらには全集等への収録状況を確認するという作業がなされなければならぬ。そのような視点から、現在、出版刊行されている日蓮教学研究所編『日蓮正宗学全書』全二三卷¹⁶、堀日亨編『富士宗学要集』全一一卷、¹⁷富士学林編『富士学林教科書研究教学書』全三〇卷¹⁸、正本堂建立記念出版委員会編『日蓮正宗歴代法主全書』全七卷¹⁹を基本文献として置きつつ、日寛著作の分類化を試みたい。

以上の方法によって日寛の一二九書を見てみると、管見の限りその内容から次の六種に分類することができる。

- (1) 「法華経に関する著作」
- (2) 「天台教学に関する著作」
- (3) 「日蓮聖人遺文の講述」
- (4) 「宗義に関する著作」
- (5) 「弟子檀越等への書状」
- (6) 「法則・瀾標等の著述」

これらを図表化し、整理したものが本稿末に記載している別表である。しかし、この分類中において不明確な

ものが存している。すなわち、No. 10 〳 23・No. 28 〳 29・No. 32・No. 34 〳 36・No. 40の計21書にみられる、「草鷄記」という名称のつく一連の著作についてである。この「草鷄」という文字の書誌学的な意味については、管見の限りでは確認できないが、この問題について、『日寛上人伝』によると、次の指摘が見られる。

「(草鷄という)意味は未だ判然としていないが、この名を上人が付されるのは天台学研究の書に限られており、宗乘に関する著や記にはたとえいかなる小文、反故、草案といえどもこの名を使われていない。」²⁰⁾

すなわち、「草鷄記」という意味は明瞭ではないが、この成語は天台学研究以外の著作には見られない、と結論付けられているため、この指摘に従い天台教学に関する著作として分類しておきたい。

では、別表を基として29書を概観するにあたり、以下、それらを文章化するという方法で、日寛の著作活動を通じてみたい。

(1) 法華経に関する著作

日寛における原典学としての、法華経各品に関する説法、談義類に該当する著作はNo. 1からNo. 9までである。

これらを見ていくと、各品の講説の順番は一見すると不統一で、そこに法則性は見えないように思われる。また、この中からその著述年代が明らかかなものに注目すると、三〇代に多く著されていることを特徴としてあげることができる。これは細草檀林での講学期間にあたる時代が中心であったということが確認できる。

(2) 天台教学に関する著作

日寛における、天台教学に該当する著作はNo. 10 〳 No. 42の計三三書である。これらを見ていくと、その収録が確認できるものについては、No. 41の『四節三益筆記詳師随聴記』の一書のみであるということが確認できる。

つまり、天台教学に関する著作については大半が現存していないもの、もしくは公開されていないものであるということが理解できるのである。

これらの著作は、まずNo. 10『集解上巻草鷄記上本』などに見られる「集解」という名称であるが、これは従義の『天台四教儀集解』の註釈書と思われる。また、No. 11やNo. 12などに見られる「玄籤」という名称であるが、これは、妙楽大師湛然の『法華玄義釈籤』の注釈書と思われる。また、No. 15の『文句草鷄記一下』等に見られる

「文句」という名称から『法華文句』の注釈書であると推察でき、No.24の『条箇下愚記末』等に見られる「条箇」という名称は『西谷名目条箇』の注釈書と思われる。また、No.41の『四節三益筆記詳師随聴記』は文句、文句記の文の講義録であると思われる。また、No.42の『上有下機愚記』は『法華玄義釈籤』の講義のものと思われる。

この中から著作年代が明らかである、No.10からNo.33の二四書に注目すると、日寛の天台教学に関する著作活動は、元禄五年（一六九二 二八才）から正徳五年（一七一五 五一才）までの、少なくとも二三年間にわたっており細草檀林、ならば蓮蔵坊での学頭時代が中心となっていることが確認できる。

(3) 日蓮聖人遺文の講述

日寛における日蓮聖人遺文の講述に該当する著作はNo.43～No.59までの一七書であり、その収録が確認できるものは一三書である。

さて、このように日寛の日蓮聖人遺文に関する著作活動を辿ることは、日寛がどのような日蓮聖人遺文を中心にその教えを請うたのであろうか、という問題を知るための重要な作業であるように思われる。そこで、あらた

めて日寛の講述した日蓮聖人遺文を講述年代順に列挙すると以下のようなになる。

『立正安国論』（No.43）

『撰時抄』（No.44）

『法華題目鈔』（No.45）

『法華取要抄』（No.46）

『開目抄』（No.47）

『当体義鈔』（No.48・No.54）

『観心本尊抄』（No.49・No.50・No.52・No.53）

『報恩抄』（No.51・No.60）

『如説修行鈔』（No.55）

『妙法曼荼羅供養事』（No.56・No.57）

『当体蓮華鈔』（No.58）

このように見てみると、日寛は五大部をはじめ、『法華題目鈔』、『法華取要抄』、『当体義鈔』、『如説修行鈔』、『妙法曼荼羅供養事』、『当体蓮華鈔』等を講述していることが確認できる。また、『観心本尊抄』の講述は弟子の講義録も含め、実に四書を数える。このようなことから、日寛にとって『観心本尊抄』はとりわけ重要視された御遺文であったということが理解できるのである。

また、この中から、その著述年代が明らかなものに注

目すると、正徳五年（一七一五）に著された、No.43の『安国論愚記上下』から、日蓮聖人遺文に関する著作活動は始まっており、これは時代的には蓮藏坊学頭時代以降からはじまったことが確認できる。

すなわち、学頭時代の著作がNo.43〜47までの五書であり、その後、大石寺第二六世法主へ晋董した、享保三年（一七一八）から享保五年（一七二〇）の間には、日蓮聖人遺文に対する著作活動は行っておらず、大石寺の法灯を日養に譲り、再び蓮藏坊に住した期間以降に記されたものが、No.48『当体義抄文段』からNo.52『本尊抄説法』までの四書である。

つまり、確認できる記録からは、日寛が日蓮聖人遺文を講述した足跡は、細草檀林から大石寺へ戻り学頭職について以降に始め、法主職についている期間は日蓮聖人遺文に対する講述を行っていなかったということが理解できるのである。

(4) 宗義に関する著作

続いて、日寛における教学上に関する著作は、No.60〜No.97の計三八書であり、その収録が確認できるものは二九書である。

この中から、その著述年代が明らかであるNo.60からNo.75の一六書を見ると、細草檀林での修学時代にあたる元禄一三年（一七〇〇 三六才）から、亡くなる前年の享保一〇年（一七二五 六一才）に至るまでの、長期にわたって書かれたものであるということが確認できる。

また、No.70〜75の六書は後世、『六卷抄』と称され、日寛教学の要とされる著作であるが、それ以外にも日寛の教学思想についてうかがうことができる著作も多いように思われる。

すなわち、No.81からNo.91の著作は、日寛の教学思想が顕著にあらわれているように見受けられるのである。例えば、No.86『蓮祖ハ末法下種ノ仏故自称南無日蓮大聖人』や、No.90『蓮祖即是积尊事』、No.91『蓮祖本因妙教主事』等は、その題号からも日寛の、日蓮聖人への信仰の世界を見ることができるといえる。

(5) 弟子檀越等への書状

日寛が弟子や檀越へ宛てたと思われる、書簡・消息等に該当する著作を列挙するとNo.98〜No.129の計二三書であり、収録が確認できるものは四書のみである。

これらを見ていくと、その全てが大石寺法主になった

以降、すなわち享保三年（一七一八 五四才）以降のもののみであるということが確認できる。

また、これらの書状は特に、檀越と思われる人物に宛てた書状が多いように見受けられる。すなわち、No. 98、99、100の「福原式治」、No. 102の「もしをござん」、No. 113の「劔持彦三郎」、No. 114の「松任治兵衛」、No. 115の「市郎右衛門」、No. 116の「板倉伊兵衛」、No. 117の「椎名孫右衛門」、No. 119、120の「浜田文蔵」の八名である。

以上の八名の檀越の中から、確認できる人物は福原式治のみである。『日寛上人伝』によると、「福原式治という人物は、金沢における大石寺の宗旨を信仰する中心的檀越であり、三年間に百余人を教化折伏し、以下長年にわたる金沢法難とその不屈の信仰の発端を開いた強信の信者であった」と⁽²¹⁾とされている。

(6) 「法則」・「瀾標」等の著作

日寛における「法則」・「瀾標」等に該当する著作は、No. 121とNo. 129の九書である。この中からその収録が確認できるものはNo. 122とNo. 126の二書のみである。また、No. 127『鐘銘』は、『寛伝』によると、享保三年（一七一八）、日寛が大石寺二六世となった頃、笹井延重という人物が、

日寛に感銘をうけ、梵鐘を寄進したという記述があり、『鐘銘』という書名からその内容をうかがうと、梵鐘に名をつけた書であると推察でき、それに関連する著作であると考えられるため、この頃の著作であると思われる。

三、おわりに

以上、本稿においては、日寛の著作活動に視点を置き、その伝記を確認し、著作の分類・検討を加えてきた。これらによって理解できることとして、正本があるとされている著作についてもその収録が確認できなかったものが多いことである。先に述べた通り、現在一般的に披見が難しい全一三四巻に及ぶ『富士宗学全集』にのみ収録される日寛の著作もあると考えられるため、さらに著作に対して検討を加えたい。⁽²²⁾また、今後の課題としては、より詳細な日寛の伝記を構築し、その後、代表的著作である『六巻抄』に注目し、教学的構造を究明したいと考えている。

註

(1) 執行海秀著『日蓮宗教学史』（平楽寺書店 平成一三年 第一三刷）六一七頁・二七五頁

(2) 本書は一紙のみの形態であり、真蹟の存在は確認できないが、日蓮正宗宗務院教学部編『日寛上人伝』（昭和五〇年 日蓮正宗宗務院教学部）の巻頭部分に、大石寺三二世日因（一六八七—一七六九）が宝暦一四年（一七六四）日寛役後三八年）に著した写本が記載されており、それを参照した。

(3) 本書は、文政八年（一八二五）に大石寺四八世日量が、日寛の一百遠忌を記念し作成された日寛の伝記であり、『富士宗学要集』第五卷（昭和三年 富士宗学要集刊行会）に収録されている。ただし、執行海秀著『興門教学の研究』によれば、本書はその出典を明らかにしていないという問題を指摘されている。しかし、その問題をふまえた上で、先師の著した日寛の伝記の中では、本書が最古のものであるとも評価されており、本書によって日寛伝を構築されている。

(4) 本書は、日寛没後一一〇年後にあたる、天保七年（一八三六）に大石寺四八世日量が、一八世日精より、四八世日量に至るまでの歴代大石寺法主の伝記を記した著作であり、『富士宗学要集』第五卷（昭和三年 富士宗学要集刊行会）に収録されている。内容としては、歴代法主の略伝を記したものである為、他上人と鈎合の上に、「日寛上人伝」を簡約したもののように見受けられる。

(5) 管見の限り、年代順に列挙すれば以下の通りである。堀日亨著『日寛上人全伝』（昭和五年）、日蓮正宗宗務院教学

部『日寛上人伝』（昭和五〇年 日蓮正宗宗務院教学部）、高橋肅道著『日蓮正宗史の研究』（平成一四年 妙道寺事務所）、榎木境道著『日寛上人と興学』（平成一五年 妙教編集室）等である。

(6) 望月敏厚著『日蓮宗学説史』（昭和四三年 平楽寺書店）
(7) 執行海秀著『日蓮宗教学史』（平成一三年 第一三刷 平楽寺書店）

(8) 執行海秀著『興門教学の研究』（昭和五九年 海秀舎）
(9) 父母の名称については、日寛著『口上』に「日寛の父静円靈位母妙真靈尼」と記していることから、法号であると思われる。

(10) ただし、出生地、並びに生年月日には異説がある。すなわち、日寛著『口上』では、八月七日、上野国前橋とあり、日量著『日寛上人伝』では八月八日、上野国館林とある。本稿においては、『口上』の説に従うこととする。

(11) 『日本歴史大辞典』第九卷（昭和四四年 河出書房新社）六六五頁に収録されている、「六十六部」の項を参照した。
(12) 日量著『続家中抄』によれば、日精は天和三年（一六八三）の夏に常在寺を日永に付属し、同年一月五日に示寂とある。

(13) 『日本歴史地名大系「千葉県の地名」』第二二卷（平成八年 平凡社）に収録されている、「細草村」の項を参照した。

(14) 高橋肅道著『日蓮正宗史の研究』五〇七頁
(15) 高橋肅道著『日蓮正宗史の研究』五二四頁

- (16) 昭和三四年に山喜房より発行されている。なお、日寛の著作は第四巻「日蓮正宗部」に集約されている。
- (17) 昭和三二年に山喜房より発行されている。
- (18) 昭和四六年に富士学林より発行されている。
- (19) 昭和四七年に大石寺より発行されている。なお、日寛の著述は四、五、六、七巻に集約されている。
- (20) 『日寛上人伝』三八頁
- (21) 『日寛上人伝』六三頁
- (22) また、『日寛上人伝』には、日寛が詠じた漢詩や雑俳等が多数紹介されている。これらからも、日寛教学の一端を伺うことができると思われるため、今後の課題としたい。

三、日寛の著作活動（別表資料）

凡例

- 1) 書名は『日寛上人伝』を基とし、同じ著作で、書名が異なる場合はその都度下に（ ）でくくり、併記した。
- 2) 『正本有り（『寛伝』）』としているものは、『日寛上人伝』には「正本有り」と記されているものの、管見の限りその収録について確認できなかったものである。おそらく、現在閲覧することが難しい『富士宗学全集』等、一般的に出版・刊行化されていない書物に収録されているものと思われる。
- 3) 本表で引用した書物の略称を示すと、以下の通りである。
『日蓮宗宗学全書』＝『宗全』・『富士宗学要集』＝『富要』・『富士学林教科書研究教学書』＝『研教』・『日蓮正宗富士大石寺歴代法主全書』＝『法全』・『日寛上人伝』＝『寛伝』

(1) 法華經に関する著作

番号	書名	著作年月日	年齢	正本・写本の区分	日蓮宗宗学全書	富士宗学要集	富士学林教科書研究教学書	日蓮正宗富士大石寺歴代法主全書	備考
1	序品説法 (序品談義)	元禄10年 (1697) 5月28日	33歳	正本有り (『寛伝』) 写本(大石寺)			10巻 685頁	4巻 3頁	『寛伝』には正本有りとされているが、『法全』によると「写本大石寺蔵」とある。また、写本の書写者についての記述は見られない。
2	神力品談義	元禄10年 (1697) 5月28日	33歳	日正写本(大石寺)			10巻 631頁	4巻 400頁	
3	寿量演説抄 上中下 (寿量品談義)	元禄12年 (1699) 6月29日	35歳	正本(大石寺)		10巻 127頁	11巻 1頁	4巻 139頁	『富要』によると寛真日如講述、文啓日嚴(30世日忠)であると思われる)「丁間」とあり、『寛伝』39頁に正本と見られる写真が掲載されている
4	宝塔品下	元禄13年 (1700) 3月2日	36歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているか、所在未詳
5	薬王菩薩本事品第二十三 (薬王品稱即消滅談義)	元禄16年 (1703) 12月下旬	39歳	正本(大石寺) 古川泉保写本 (雪山文庫)			10巻 557頁	4巻 445頁	

6	湧出品愚記	宝永8年 (1711) 3月21日	47歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳
7	方便品誦誦心地事	正徳6年 (1716) 2月22日	52歳	正本(大石寺)	3巻 318頁	9巻 723頁	4巻 99頁		
8	囑累品第二十二談 義	年次未詳		日因写本(大石寺)			4巻 431頁	著作年月日のみ未詳	
9	寿量過去益物下分別品	年次未詳		正本有り (『寛伝』)				『寛伝』には書名の記載があり正本有りとしているが、著作年月日並びに所在未詳	

(2) 天台教学に関する著作

10	集解上巻草鷄上本	元禄5年 (1692) 5月14日	28歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり正本有りとしているが、所在未詳。『天台四教義集解』の注釈書と思われる
11	玄籤第一草鷄記一上	元禄7年 (1694) 3月11日	30歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。ただし、同書の50頁に、『玄籤一草鷄記上』という著作の写真が掲載されており、「総本山蔵」と記されている。書名が酷似しているため本書の真蹟であると思われる。『法華玄義釈籤』の注釈書と思われる
12	玄籤第一草鷄記一中	元禄7年 (1694) 5月6日	30歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。ただし、同書の50頁に、『玄籤一草鷄記中』という著作の写真が掲載されており、「総本山蔵」と記されている。書名が酷似しているため本書の真蹟であると思われる。『法華玄義釈籤』の注釈書と思われる
13	玄籤第二草鷄記一	元禄7年 (1694) 11月12日	30歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『法華玄義釈籤』の注釈書と思われる

14	文句第一卷未疏・第三別序下草鷄記	元禄11年 (1698) 2月14日	34歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『法華文句』の注釈書と 思われる
15	文句草鷄記一下	元禄11年 (1698) 8月12日	34歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有り りとしているが、所在未詳。ただし、同書の50頁に、 『文一下草鷄記』という著作の写真が掲載されており、 「総本山蔵」と記されている。書名が酷似しているた め本書の真贋であると思われる。『法華文句』の注釈 書と思われる
16	文句三方便題号記 三下草鷄記	元禄12年 (1699) 閏9月9日	35歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有 りとしているが、所在未詳。『法華文句』の注釈書と 思われる
17	文句三方便入門初 記三下草鷄記	元禄12年 (1699) 閏9月9日	35歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有 りとしているが、所在未詳。『法華文句』の注釈書と 思われる
18	文四草鷄記四本	元禄13年 (1700) 4月8日	36歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有 りとしているが、所在未詳。ただし、同書の50頁に、 『文四本草鷄記』という著作の写真が掲載されており、 「総本山蔵」と記されている。書名が酷似しているた め本書の真贋であると思われる。『法華文句』の注釈 書と思われる。
19	文四草鷄記四末	元禄14年 (1701) 4月14日	37歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有 りとしているが、所在未詳。『法華文句』の注釈書と 思われる。
20	文句第五草鷄記	元禄14年 (1701) 4月21日	37歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有 りとしているが、所在未詳。『法華文句』の注釈書と 思われる
21	文句第六草鷄記	元禄15年 (1702) 5月20日	38歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有 りとしているが、所在未詳。『法華文句』の注釈書と 思われる
22	文第七草鷄記	元禄15年 (1702) 11月3日	38歳	正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有 りとしているが、所在未詳。『法華文句』の注釈書と 思われる

23	法師品 草鷄記	元禄16年 (1703) 2月12日	39歳	正本有り 〔『寛伝』〕					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『法師品』とあるが、「草鷄記」と付くため、天台学関係の著作と思われる
24	条簡下愚記未 出品	宝永4年 (1707) 4月11日	43歳	正本有り 〔『寛伝』〕					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『西谷名目条簡』の注釈書であると思われる
25	条簡上愚記本	宝永4年 (1707) 4月17日	43歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳。『西谷名目条簡』の注釈書であると思われる
26	条簡上愚記未	宝永4年 (1707) 9月12日	43歳	正本有り 〔『寛伝』〕					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『西谷名目条簡』の注釈書であると思われる
27	集解上 法華下	宝永4年 (1707) 10月14日	43歳	正本有り 〔『寛伝』〕					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『天台四教儀集解』の注釈書であると思われる
28	集解下 草鷄記	宝永4年 (1707) 11月6日	43歳	正本有り 〔『寛伝』〕					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『天台四教儀集解』の注釈書であると思われる
29	集解上 草鷄記本	宝永5年 (1708) 4月26日	44歳	正本有り 〔『寛伝』〕					『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳。『天台四教儀集解』の注釈書であると思われる
30	玄鏡第四記 行妙 下	宝永6年 (1709) 8月23日	45歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳。『法華玄義釈義』の注釈書であると思われる
31	玄鏡筆記七十	宝永7年 (1710) 10月15日	46歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳。『法華玄義釈義』の注釈書であると思われる
32	文句第九草鷄記 勇 出品	宝永8年 (1711) 3月27日	47歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳。『法華文句』の注釈書であると思われる
33	玄鏡新成頌本下	正徳5年 (1715) 11月7日	51歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳。『法華玄義釈義』の注釈書であると思われる

34	文句第四末草鷄記	系年未詳						『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳。『法華文句』の注釈書であると思われる
35	文句上末疏草鷄記 一末	系年未詳	正本有り 〔寛伝〕					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日並びに所在未詳。『法華文句』の注釈書であると思われる
36	条簡上草鷄記	系年未詳						『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳。『西谷名目条簡』の注釈書であると思われる
37	条簡中愚記末	系年未詳	正本有り 〔寛伝〕					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日並びに所在未詳。『西谷名目条簡』の注釈書であると思われる
38	条簡下愚記品	系年未詳	正本有り 〔寛伝〕					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日並びに所在未詳。『西谷名目条簡』の注釈書であると思われる
39	集解序記	系年未詳						『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日並びに所在未詳。『天台四教儀集解』の注釈書であると思われる
40	集解草鷄記	系年未詳	正本有り 〔寛伝〕					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日並びに所在未詳。『天台四教儀集解』の注釈書であると思われる
41	四節三捺筆記詳師 隨聽記	系年未詳	日善写本(雪山 文庫)	10卷 32頁	16卷 343頁			著作年月日のみ不明である。「奥書きに詳師の隨聽記を以てこれを写す」とあることから、日詳(28世)の講義録であると思われる
42	上下下機愚記	系年未詳	正本有り 〔寛伝〕					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日並びに所在未詳

(3) 日蓮聖人遺文の講述

43	安国論愚記 上下 (立正安国論文段)	正徳5年 (1715) 10月28日	51歳	正本(大石寺)	4卷 238頁	4卷 299頁	7卷 329頁	5卷 3頁	
----	-----------------------	--------------------------	-----	---------	------------	------------	------------	----------	--

44	撰時抄上下愚記 (撰時抄文段)	正徳6年 (1716) 3月18日	52歳	正本(大石寺)	4巻 276頁 4巻 299頁	4巻 331頁	8巻 1頁	5巻 413頁	『寛伝』50頁に、『撰時抄上愚記上』・『撰時抄下愚記』 という、二書の著作の写真が掲載されており、『総本山 蔵』と記されている。書名が酷似しているため本書 の真蹟であると思われる
45	法華経題目抄文段 (法華題目抄文段)	正徳6年 (1716) 6月13日	52歳 或いは堀田亨私 蔵本)	正本(雪山文庫 蔵本)	4巻 346頁	4巻 387頁	9巻 175頁	6巻 380頁	『研教』によると著者堀田亨氏が「私蔵御正本に依り」 と奥書きしており、堀田亨氏の私蔵本であることが確 認できる。「雪山文庫」の意とも読み取ることができ るが、他のものはその所在を「雪山文庫蔵」と明らか にしているため、堀田亨氏の私蔵本と見るのが妥当か あるように思われる
46	法華取要抄文段 (取要抄文段)	享保2年 (1717) 8月15日	53歳	正本(大石寺)	4巻 327頁	4巻 373頁	9巻 1頁	6巻 171頁	
47	開目抄上下愚記 (開目抄文段)	享保2年 (1717)頃 月日記載な し	53歳	正本(大石寺)	上=4巻 245頁 下=4巻 259頁	上=4巻 305頁 下=4巻 317頁	7巻 467頁 7巻 663頁	5巻 76頁	『寛伝』50頁に、『開目抄文段下本上』・『開目抄文段下末』 という二書の著作の写真が掲載されており、「総本山 蔵」と記されている。書名が酷似しているため本書の 真蹟であると思われる
48	当体義抄文段	享保6年 (1721) 2月16日	57歳	正本(大石寺)	4巻 352頁	4巻 392頁	9巻 285頁	6巻 330頁	この日は日蓮聖人の誕生から500年の正当の日にあた る
49	本尊抄題号	享保6年 (1721) 閏7月17日	57歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが 所在未詳
50	観心本尊抄文段 上下	享保6年 (1721) 11月上旬	57歳	正本(大石寺)	上=4巻 127頁 下=4巻 179頁	上=4巻 213頁 下=4巻 253頁	8巻 571頁	5巻 266頁	『寛伝』48頁に本書の真蹟と見られる写真が掲載され ている
51	報恩抄文段 上下	享保7年 (1722) 3月28日	58歳	正本(大石寺)	上=4巻 308頁 下=4巻 312頁	上=4巻 357頁 下=4巻 361頁	8巻 263頁	6巻 3頁	

52	本尊抄読法	享保11年 (1726) 1月	62歳							『寛伝』には書名・著作年月のみ記載されているが、日にち、並びに所在は未詳。この著作は年次が同じことから、日寛が公儀への挨拶のため、江戸へ行った際、常在寺で『観心本尊抄』讀じた記録が確認できるため、これを聴聞者が記録したものであると思われる
53	観心本尊抄首日相 聞書	年次未詳 7月8日		日因写本(雪山 文庫)	10卷 1頁	14卷 433頁				『寛伝』には書名・月日のみ記載されているが、著作年は未詳である。『研教』の期日亨氏の奥書に依れば日相ではなく、日因(31世)の聞書とされている
54	当体義抄・科文	系年未詳		正本有り (『寛伝』)						『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日、並びに所在未詳
55	如説修行抄筆記	系年未詳 (正徳元年 ~享保3年 のものか)		孝察写本(雪山 文庫) (『研教』による) 写本(大石寺 『法名』による)	4卷 370頁	4卷 407頁	9卷 469頁	6卷 301頁		『大式日寛記』とあることから、蓮盛坊学頭時代の著述であると推察される。そのため、日寛の蓮盛坊学頭時代にあたる正徳元年(1711)6月~享保3年(1718)3月までの著作であると推察される
56	妙法曼荼羅供養抄 (妙法曼荼羅供養 抄談義)	系年未詳		正本(大石寺)	4卷 378頁	10卷 70頁	9卷 375頁	6卷 436頁		著作年月日のみ未詳
57	妙法曼荼羅供養抄 見聞筆記	系年未詳		写本(大石寺 『法名』による) 孝察写本(石山 文庫)	4卷 413頁	4卷 427頁	9卷 457頁	6卷 457頁		著作年月日のみ未詳
58	当体蓮華抄	系年未詳								『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳
59	報恩抄分科草案	系年未詳		正本(大石寺蔵)				6卷 147頁		著作年月日のみ不明である

(4) 宗義に関する著作

60	御堂御拜何故 刻師子形耶 (御堂宮殿刻龍等)	元禄13年 (1700) 6月大吉日	36歳	正本(大石寺)		9巻 704頁		『研教』では「御堂四維何故刻竜之形耶」に収録されている。『寛伝』によると、「本書は総本山御影堂の龍や、獅子の彫刻につき、その請れを当家甚深の意より活積されている。(中略)この前年の同12年御影堂の修復が始められその落成に際し述記されたものと思われる」としている
61	病脚消滅抄	元禄16年 (1703) 12月下旬	39歳					『寛伝』には書名・著作年月のみ記載されているが所在未詳
62	法衣供養談義	宝永2年 (1705) 2月	41歳	正本(大石寺) 古川果保写本 (雪山文庫)		3巻 270頁	10巻 467頁	『寛伝』によると、「五篇からなり、法衣の由来、功德を述べられたものである。本書起筆の縁由は、彼に書明らかで、信徒原某の法衣一領の供養を請して、本書を認められ、その功德を彼の亡妻の靈前に回向すると書かれており、『六巻抄』の一つに数えられる『当家三衣抄』は、本書を整足されたものごとくである」としている
63	父母報恩談義 (新説結座説法か?)	宝永2年 (1705) 6月22日	41歳	正本有り (『寛伝』)				『法全』6巻所収の『新説結座説法』を見ると、著作日が宝永2年6月22日とあり、「父母報恩談義」の著作日と軌を一にし、『寛伝』には『新説結座説法』の書名が無いため、両書は同一のものと考えられる
64	後五百歳中広宣流 布	宝永3年 (1706) 10月12日	42歳	正本(大石寺)		10巻 241頁	4巻 485頁	
65	宗教深秘抄	享保元年 (1716) 9月17日	52歳	浄俊写本(慈由 房藏)		10巻 92頁	10巻 445頁	『寛伝』によると、「法華経の是好良業、今留在此の文、及び『法華取要抄』の「本門の本尊と戒壇と題目の五字」の文の意は、宗教の五箇を明らかにすることによって初めて頓解できるとし、五箇につき一々詳説を加えている」としている
66	本化再誕抄	享保2年 (1717) 9月21日	53歳	日詳写本			10巻 1頁	『研教』は日詳写本に基づき、所在は示さず

67 (爾前無得道ノ事)	同上	同上	日詳写本			10巻 29頁		『研教』では『本化再誕抄』に含まれているが、所在は示さず
68 主師親三徳抄と (主師親三徳抄と 同一書か?)	享保3年10 月13日 (采年に異 説あり)。に 『寛伝』に 享保3年10 月13日とあ るが『法全』 によると元 禄13年頃と あり)	36歳 又は 54歳	正本(大石寺)	10巻 100頁	10巻 369頁	4巻 106頁		『法全』には著者名に「覚真日如」とあるが、『研教』・『誓要』には「大貳日覚」の署名がある。また、『主師親抄』と『主師親三徳抄』は酷似しているが、若干の文字の出入りが見られる。思うに前者は未治本で後者は再治本なのではないだろうか。また、『寛伝』によると、『本書は譬喩品の「今此三界皆是我有……唯我一人能為救護」の文を挙げて、主師親の三徳に配し、未法十八の簡条を設け、汎く内外の書を援用して、末法の三徳具備は、大聖人に限ると説く」としている
69 三宝抄	享保7年 (1722) 1月5日	58歳	日東写本(大石寺)『法全による』 日重写本(雪山文庫)『研教』による		10巻 79頁	4巻 349頁		『寛伝』によると、「寿量品の「不聞三宝名」の句を中心に徒然至深して論じ、ついに末法の三宝を明らかにしている」としている
70 三重秘伝抄	享保10年 (1725) 3月上旬	61歳	正本(大石寺)	4巻 1頁	3巻 4頁	12巻 1頁	7巻 3頁	本書は後世、『六巻抄』と称される著作の一つである。また、『寛伝』によると、『三重』とは寿量文底書の一種であり、秘伝とは寿量文底書の一念三千である。つまり一念三千を中心に体系をつけるのに開目抄の該文を三段に分ち、義に十門を開いて畢竟するところ、寿量品の一切衆生を救済する下種の事の一念三千、唯、寿量品の文の底にあることを示したものである。そして文底とは、本因名字に仏法の位があること、それが上行付属の妙法蓮華經の法体なることを示されたものである」としている

71	文底秘沈抄	享保10年 (1725) 3月下旬	61歳	正本(大石寺)	4巻 22頁	3巻 69頁	12巻 59頁	7巻 69頁	本書は後世、『六巻抄』と称される著作の一つである。また、『寛伝』によると、「本抄は、宗旨の肝要である三大秘法を読み明かされている。まず本尊について事の一念三千の法体を本尊とし、それを能証、所証の上から人法に分ち、法本尊は、事の一念三千無作本有の南無妙法蓮華経。人本尊は、久遠元初自受用報身の再誕、日蓮大聖人。しかししてこの人法は、人即法、法即人の人法連一の尊体である所以を示されている。戒壇はこれを事理に分ち、事壇建立の在所は富士山であるべきことを、文、理によって論じ、題目は、信行具足の題目が本門の題目である旨を論じ、さらに、報恩抄の題目が本門の題目である旨を論じ、さらには、報恩抄の「一部の肝心」という意を、二類四種分けて分別し、死極の本意は本門寿量文底下種の題目なりとされている」としている
72	依義判文抄	享保10年 (1725) 4月中旬	61歳	正本(大石寺)	4巻 45頁	3巻 103頁	12巻 121頁	7巻 135頁	本書は後世、『六巻抄』と称される著作の一つである。また、『寛伝』によると、「題号の意は、文底の義に依って、文上を判することである。開目抄の「文底秘沈」の文に対し、撰時抄の「最大深密の正法、縁文の面に現前なり」の文について、その相連の意義を三大秘法開合の上を示されたものである。すなわち、文底の意をもつてみれば、法華経、天台の文についても三大秘法が明らかであるとい義判文している。そして宗旨の三箇の流布は、五義をもつてすべしとして、宗教の五箇を敷衍されている」としている
73	末法相応抄	享保10年 (1725) 5月上旬	61歳	正本(大石寺)	上= 4巻 65頁 下= 4巻 76頁	3巻 138頁	12巻 183頁	7巻 203頁	本書は後世、『六巻抄』と称される著作の一つである。また、『寛伝』によると、「本抄は上下に分かれ、専ら広蔵日辰の所説を難じている。上巻は彼の一部號誦論を破し、下巻は、造仏論を斥している。まず一、聖慈誦論については、一に、正行の題目を妨ぐる故。二に末法は折伏の時なる故。三に多く此の経の謂れを知らざるきまで破している。下巻の造仏論義批判は、末法に色相拈取を本尊としてはならない所以を、一、聖勝劣教主なる故。二、三徳の縁薄きが故。三、人法の説がある故、と三故を挙げて、造仏を否定し、日辰の説を論破している」としている

74	当流行事抄	享保10年 (1725) 5月下旬	61歳	正本(大石寺)	4巻 90頁	3巻 179頁	12巻 251頁	7巻 279頁	本書は後世、『六巻抄』と称される著作の一つである。また、『寛伝』によると、「当門流の正しい修行は、唱題を正行とし、方便・寿量の品誦誦を修行とする。ことを明かされ、方便品を読む理由を、所載・借文、寿量品誦誦を所載・所用の二業にありと説いている。そして唱題とは、未法の下種三宝に對する信行であるとして、他門の固執する、脱蓋の三宝に對して、下種の三宝を讀き明かされている」としている。
75	当家三衣抄	享保10年 (1725) 6月中旬	61歳	正本(大石寺)	4巻 115頁	3巻 220頁	12巻 321頁	7巻 355頁	本書は後世、『六巻抄』と称される著作の一つである。また、『寛伝』によると、「本抄はその題号に明かなごとく、当家の三衣と規定し、袈裟に素絹五条、衣に薄墨を用いる理由と、黒染衣、直線を用いない理由を、道理、引証、料簡に分けて説かれている。また袈裟に白色を用いる意、数珠の由来等を示されている」としている。
76	原始抄	系年未詳 (正徳元年 ～享保3年 頃のものか)		正本(大石寺)			10巻 205頁		著作年月日は未詳であるが、「大石寺学頭(大武)日寛記」とあることから、連盛坊字頭時代にあたる、正徳元年6月から享保3年3月までの著作であると思われる。また、『寛伝』によると、「本書は後分が失われているが、全体の結構は明かでないが、人の本尊より法の本尊についても言及している」としている。
77	本迹問答抄	系年未詳 (享保3年 ～5年頃か)		日行写本(雪山 文庫)			10巻 231頁		著作年月日は未詳であるが、「二十六世日寛述」とあることから、大石寺入山以降のものであると推察できるため、享保3年3月から享保5年2月までの著作であると思われる。
78	御堂四維何故 刻竜之形耶 (御堂宮殿刻龍等)	系年未詳		正本(大石寺)			9巻 693頁		
79	宮殿供養抄	系年未詳		正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日、並びに所在未詳
80	初心得意抄	系年未詳		正本有り (『寛伝』)					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日、並びに所在未詳

81	蓮祖義立八相	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 240頁	9巻 615頁	著作年月日のみ未詳	『蓮祖義立八相等』
82	蓮祖義立之六即	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 249頁	9巻 641頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
83	蓮祖託生食饗家所 以事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 253頁	9巻 649頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
84	日蓮二字事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 255頁	9巻 653頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
85	蓮祖本地内証外用 事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 304頁	9巻 665頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
86	蓮祖ハ末法下種ノ 仏故自標南無日蓮 大聖人事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 306頁	9巻 669頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
87	仏語無二言事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 309頁	9巻 677頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
88	蓮祖闍浮第一ノ法 華経ノ行者事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 310頁	9巻 678頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
89	闍浮第一法華経ノ 行者 即頭主師親事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 312頁	9巻 681頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
90	蓮祖即是釈尊事	系年未詳		正本(大石寺)	3巻 313頁	9巻 683頁	著作年月日のみ未詳。	『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録

91	蓮祖本因妙教主事	系年未詳		正本(大石寺)		3巻 314頁	9巻 686頁		著作年月日のみ未詳。『研教』では『蓮祖義立八相等』に収録
92	信心抄	系年未詳		正本有り 〔寛伝〕					『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日、並びに所在未詳
93	臨終用心抄	系年未詳		了哲日心写本 (所在未詳)		3巻 259頁	10巻 177頁		著作年月日のみ未詳。『寛伝』によると、『臨終の用心を教示された書で、臨終を迎える者、その臨終を看取る者の心構え、心配りなど詳しく説かれている』としている
94	造仏読誦難	系年未詳							『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳
95	信について	系年未詳							『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳
96	数珠のかけ方、六器の事	系年未詳							『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳
97	朝夕回向之事	系年未詳							『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳

(5) 弟子檀越等への書状

98	与福原式治状	享保3年 (1718) 9月16日		正本有り。 『寛伝』による と東京、妙光寺 蔵としている。					『寛伝』によると、福原式治とは「当時の金沢における大石寺の宗旨を信仰する中心人物であり、三百年間百余人を教化折伏し、以下長年にわたる金沢法難とその不届の信仰の発端開いた強信の信者であった」としている
99	与福原式治状	享保4年 (1719) 2月16日	55歳						『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳。No98と同じく福原式治へ宛てた書状と思われる

100	与福原式治照房状	享保4年 (1719) 4月	55歳					書名・著作年月のみ『寛伝』に記載されているが、日にち、並びに所在未詳。福原式治と同一人物であると思われる
101	日養上人請待状	享保5年 (1720) 1月30日	56歳	正本(大石寺)	8巻 63頁			『富要』では「僧俗謄状置文官憲文書等」に所収されている
102	もしをござん御返事	享保5年 (1720) 4月20日	56歳					『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが、所在未詳
103	賃金覚書	享保5年 (1720) 11月	56歳	正本有り (『寛伝』)				『寛伝』には書名・著作年月の記載があり、正本有りとしているが、日にち、並びに所在未詳
104	口上	享保11年 (1726) 8月7日	62歳					『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが、所在未詳。ただし『寛伝』巻頭部分に日因(31世)の写本が掲載されている
105	遺言状 (塔供養)	享保11年 (1726) 6月	62歳	正本(大石寺)	8巻 64頁			日にちのみ未詳。『富要』では「僧俗謄状置文官憲文書等」に収録されている
106	遺言状 (戒壇基金)	享保11年 (1726) 6月18日	62歳	写本(雪山文庫)	8巻 64頁			『富要』では「僧俗謄状置文官憲文書等」に収録されている
107	遺言状 (費主月並念)	享保11年 (1726) 6月18日	62歳	写本(雪山文庫)	8巻 65頁			『富要』では「僧俗謄状置文官憲文書等」に収録されている
108	報常在寺日和状	享保11年 (1726) 7月22日	62歳	正本有り (『寛伝』)				『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳
109	報日智尊師状	年次未詳 12月30日		正本有り (『寛伝』)				『寛伝』には書名・月日のみ記載があり、正本有りとしているが、著作年、並びに所在未詳
110	報常在寺状	年次未詳 10月23日		正本有り (『寛伝』)				『寛伝』には書名・月日のみ記載があり、正本有りとしているが、著作年、並びに所在未詳

111	与細草御能化中	年次未詳 11月27日	正本有り 〔寛伝〕						『寛伝』には書名・月日のみ記載があり、正本有りとしているが、著作年、並びに所在未詳
112	詳了御報	年次未詳 6月16日							『寛伝』には書名・月日のみ記載があるが、著作年並びに所在未詳。「詳了」とは日詳(28冊)、日了のことであると思われ、この二名へ宛てた書状であると推察できる
113	劔持彦三郎外六人中書	年次未詳 4月1日	正本有り 〔寛伝〕						『寛伝』には書名・月日の記載があり、正本有りとしているが、著作年、並びに所在未詳
114	松任治兵衛腰御返事	年次未詳 5月18日	正本有り 〔寛伝〕						『寛伝』には書名・月日のみ記載があり、正本有りとしているが、著作年、並びに所在未詳
115	与市郎右衛門状	年次未詳 25日							『寛伝』には書名・日どちらのみ記載されているが著作年、並びに所在未詳
116	与坂倉伊兵衛状	年次未詳 1月17日	正本有り 〔寛伝〕						『寛伝』には書名・月日のみ記載があり、正本有りとしているが、著作年、並びに所在未詳
117	与椎名孫右衛門状	年次未詳 1月30日							『寛伝』には書名・月日のみ記載されているが、著作年、並びに所在未詳
118	消息	年次未詳 2月8日	正本有り 〔寛伝〕						『寛伝』には書名・月日の記載があり、正本有りとしているが、著作年、並びに所在未詳
119	与浜田文蔵状	系年未詳							『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳
120	与浜田文蔵状	系年未詳							『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳

(6) 「法則」・「淵標」等の著述

121	堂供養法則	元禄13年 (1700) 8月	36歳	正本有り 〔『寛伝』〕						『寛伝』には書名・年月のみ記載があり、正本有りとしているが、日にち、並びに所在未詳
122	抜書雑々集 上下 (當家法明文抜書 等)	正徳4年 (1714)	50歳	正本(大石寺)		9巻 737頁				月日のみ未詳である
123	上号評議書	正徳6年 (1716) 3月22日	52歳	正本有り 〔『寛伝』〕						『寛伝』には書名・著作年月日の記載があり、正本有りとしているが、所在未詳
124	日道上人申状紛失 記	享保9 年7月	60歳							『寛伝』には書名・著作年月のみ記載されているが、日にち、並びに所在未詳。備忘録、記録の類と思われる
125	日然上人回章	享保10年 (1725) 2月18日	61歳							『寛伝』には書名・著作年月日のみ記載されているが所在未詳。回覧書と思われる
126	淵標 上中下	承年未詳 (元禄2年 ~宝永5年 頃か)				11巻 383頁				著作年月日は未詳であるが、『寛伝』によると、「上人自製の辞書で、上中下の三冊からなっている。仏教用語を中心に収録され、一々の語彙に、出典、巻、丁数を示してある。収録書名は広汎に亘り、仏書は勿論、和漢書、歌集等まで亘設してである。縦十八センチ、横十三センチの袖珍品で、寛真日如の書名があるところから、物字時代に作られたもので、追記が無数にあるのは爾来所持されていたゆえであろう」としている為、細草植林での講学時代にあたる、元禄2年から宝永5年までの著作と考えられる。
127	鐘銘	承年未詳 (享保3年 頃か)								『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳。ただし『寛伝』に享保3年、日寛が大石寺26世となった頃、笹井延重という人物が日寛に感銘を受け、鐘銘を寄進したという記述があるが、そのことであろうか。だとすると、享保3年頃の著作であると考えられる

128	青蓮録銘	系年未詳							『寛伝』には書名のみ記載されているが、著作年月日、並びに所在未詳
129	雑要集 天地	系年未詳	正本有り (『寛伝』)						『寛伝』には書名の記載があり、正本有りとしているが、著作年月日並びに所在未詳